

演習林と珈琲の百年物語



菅 大志（大志農園代表・北海道大学農学博士）

はじめに

「演習林」と埔里人が呼ぶ場所がある。ここは台湾の地理中心、南投縣埔里の街中にある緑地で、今も昔も変わらず埔里人の憩いの場となっている。演習林内には遊歩道があり、愛犬が私を散歩に連れて行ってくれる。

ここに歴史を感じさせる木造の小さな建物がある。看板をみると、日本統治時代の政府指定歴史建物のようだ。よく見ると、屋根は瓦葺きではなく、金属板が菱型に葺かれている。

なぜか私は、この屋根を見上げていると北海道を思い出すのだ。そのため、この建物が、いつ誰が何の目的で作られたものなのか不思議に感じたが、建物の中には誰もおらず何もわからなかった。

この時はまだ、この演習林が百年前から北海道とつながっているとは夢にも思わなかった。



演習林の石碑

埔里珈琲大使の黄義永先生

埔里を第二の故郷としている日本人は、台湾中を東西南北回って、最後に中心の埔里にたどりついた人が多い。埔里は、気候がよく、長閑で、親日的だからだろうか。

その親日の一人で日本統治時代の埔里に生まれ育った埔里を代表する画家黄義永先生がいる。この方は演習林に近い南光小学校の教師を長年務めた地元の名士であり、故郷埔里の珈琲大使でもある。美しい日本語を話す黄先生の元に、自然と埔里の日本人が集うようになった。私もその中の一人であり、黄先生に演習林について伺うことにした。

すると演習林は近所の遊び場だったようで、「コーヒーの赤い実を食べて、種を飛ばして遊んだ。」「演習林のコーヒーの木が、恵蓀や古坑へ運ばれて行った。」と幼い頃の思い出を懐かしそうに語ってくださった。

私はそれまでコーヒーに関心がなかったが、恵蓀や古坑の名前は聞いたことがあった。恵蓀といえばコーヒーで有名な中興大学の恵蓀林場であるが、実はこの埔里の演習林も中興大学の所有であった。

また、古坑といえば「台湾珈琲の故郷」として名高い。確かに埔里から古坑は距離的に近いので、黄先生の話のように種子や苗木が運ばれたとしても不思議は無い。まさか、演習林は「台湾珈琲の故郷」の故郷なのか？私は強い好奇心を抱いた。



黄義永先生

林耀堂先生と演習林のコーヒーの木

早速演習林に戻り、日本統治時代に植えられたコーヒーの木を探すことにした。その当時に植えられたのなら樹齢70年以上の古木だ。この古木を見つければ、演習林のコーヒーの歴史を証明する証拠になるはずだ。そう思って探し始めたのである。ところが、隅から隅までどこをどんなに探しても、そんな古木は一つも見つからなかった……。「黄先生の記憶違いとは思えない。きっと何らかの理由で切られてしまったのだろう。」そんなことを考えながら呆然としていた。

そんな私の目の前に一匹のリスが現れた。今では、埔里の街中では見ることが出来なくなったりリスだが、この演習林にはまだ残っている。この演習林がこのリスたちにとっては最後の故郷なのだ。このリスは演習林の木から木へ移動しており、地面にも下りてくる。太い尻尾を立てているそのリスを目で追っていると、私を導くかのように古民家の方へ走っていった。

この古民家はまるで演習林と一体化しているように建っており、演習林の建物と同様にとても歴史を感じさせる。私はこの古民家の住人なら、コーヒーの木について何か知っているかもしれない。会ってお話を伺いたいと思うようになっていった。

そんな時、演習林から程近い私の妻の店にやってきた家族があった。この家族の父親が、あの演習林と一体化した古民家の持ち主の林耀堂先生で

あった。林先生は黄義永先生の教え子であり、埔里で生まれ育ち、台北の大学で美術を教えている有名な画家だ。休暇を利用して故郷埔里に帰ってきたのである。林先生の家は演習林と一体化しているため、当然演習林を庭のように遊んで育ったようだ。

そこで、コーヒーの木についてお伺いすると、「熱帯植物が沢山植えてあり、コーヒーの木もあった。」「コーヒーの赤い実を食べて、種を飛ばして遊んだ。」と、はっきり覚えていた。そこで、演習林のどの場所にコーヒーの木が植えてあったのか案内していただいた。その場所は、演習林の南側の境界付近で、その境界に沿うように列状に植えられていたようである。



林耀堂先生

しかし、とても残念なことに、当時コーヒーの木が植えてあった場所は、その後の南安路の道路拡張工事によって消滅してしまったのだ。私がどんなに探してもコーヒーの古木が見つからないのも当然である。

埔里歴史研究家の陳義方先生

演習林の歴史を証明するコーヒーの古木がなくなっていることに失望していた私に、希望を与えてくれる人が現れた。

その人こそ、埔里に生まれ育ち、埔里図書館で故郷埔里の歴史を研究している陳義方先生である。陳先生は黄義永先生の南光小学校の教え子であり、再度林耀堂先生の古民家へお邪魔した時、



日本統治時代の演習林事務所

林先生の隣に陳先生が座っていたのである。陳先生は、私が演習林の歴史を調べていることを知っていて、わざわざ林先生の古民家まで来てくださったのである。陳先生は埔里の歴史を長年研究しているだけあって、演習林の歴史についてもご存知のようだった。そこで、早速、演習林の歴史についてご教示いただくことにした。



陳義方先生

北海道帝國大学農学部附属台湾演習林

台湾には模範林場と呼ばれたものが4つあり、それらは日本統治時代は帝國大学演習林だった。第一模範林場は東京大学（溪頭）、第二模範林場は京都大学（扇平）、第三模範林場は北海道大学（恵蓀）、第四模範林場は九州大学（石碇）である。

南投縣では東京大学が竹山郡鹿谷庄及新高郡蕃地（現在の溪頭）に演習林を、その事務所を林杞埔支廳竹山街（現在の竹山鎮）に作った。そして北海道大学が能高郡埔里社支庁管内蕃地（現在の仁愛郷恵蓀）に演習林を、その事務所を能高郡埔里社水頭（現在の埔里隆生路）につくったのであった。埔里の演習林は正式名称が北海道帝國大学農学部附属台湾演習林派出所で、ここに事務所や学生宿舎などを整備し主任（演習林長）を常駐させた。

私は仰天した。散歩に通っている埔里の演習林は、母校の演習林だったのだ。偶然にも北海道大

学農学部は私が学んだところであり、在学中は演習林に通ったものである。日本統治時代はここが北海道大学演習林であり、私と同じように北海道で学び、埔里へ渡ってきた先輩たちがいたなんて……。私は不思議な縁を感じずにはいられなかった。

北海道大学と台湾とのつながり

現在の台湾では北海道大学はほとんど無名だが、日本統治時代は様子が異なる。台湾総督府は、「農業は台湾、工業は日本」を旗印とした農業政策を実行していたため、農学を学んだ北海道大学卒業生を重用していたからだ。

北海道大学（札幌農学校）は1876年に開校した日本初の高等農業教育機関であり、日本統治50年の間、極めて多くの卒業生を台湾に送り続けてきた。

特記すべきは、台湾総督府が最重視した、糖業と蓬莱米生産において、台湾糖業の父と呼ばれる新渡戸稲造、蓬莱米の父と呼ばれる磯栄吉が卒業生であることだ。

また、埔里人には馴染みのある台湾紅茶の故郷として知られる日月潭の紅茶試験所では、新井耕吉郎所長を含め、歴代所長全て北海道大学の卒業生であることもたんなる偶然ではない。



紅茶試験所内の新井耕吉郎の銅像



紅茶試験所の石碑「台湾紅茶の故郷」

埔里演習林百周年

この北海道大学が埔里に演習林を開設した記録が埔里図書館にも残っていた。その日付は、1917年8月15日。つまり今年2017年が埔里演習林百周年なのだ。終戦記念日と同じ8月15日なので、日本統治時代が28年、台湾光復後が72年で計百年。無事に百周年を迎えることができたのは、埔里の人々、中興大学の人々のおかげだ。このことに埔里の日本人として、母校の一人として、心から感謝申し上げたい。

菱葺屋根の政府指定歴史建物

日本統治時代に作られた木造建築は、今や老朽化や火災によってほとんど残っていない。実際、同じ境遇で建てられた東京大学、京都大学、九州大学の演習林事務所も今はもうない。一方、北海道大学の演習林事務所は埔里の人々に見守られ、2002年には、政府指定歴史建物に指定されている。

冒頭で述べた屋根は菱葺屋根という明治・大正時代（1868 - 1926年）に西洋人設計士に愛用されたデザインである。この菱葺屋根は、菱形の金属板を一枚ずつ下から上へ重ねていくため、陶器製の本瓦に比べ、軽量で雪に強い。さらに、銅板を用いた菱葺きの場合、百年以上の耐用年数があ

るそうだ。

演習林事務所の菱葺屋根は、緑青色の色合いから判断すると、銅板のようである。もしかしたらこの木造建築が百年の時を超え、風雨に耐えてこられたのは、この銅板の菱葺屋根のおかげかもしれない。

菱葺屋根と北海道とのつながり

開拓期の北海道では、雪に強い構造をもつ菱葺屋根が重宝された。当初は西洋人設計士が愛用したため、洋風建築に多かったが、次第に日本建築の神社仏閣や小さな物置に至るまで北海道の様々な建物で採用されていったようである。

しかし、菱葺屋根は、その菱形の金属板を一枚ずつ重ねていく工法から、職人の高度な技術を必要とし、手間隙がかかるため、現在の北海道では新しい菱葺屋根はほとんど見られなくなってしまった。

ところが、この菱葺屋根が、今でも普通に見られる場所がある。それが、北海道大学と北海道開拓の村である。北海道大学には今でも明治・大正時代に建てられた多くの文化財が残っているし、北海道開拓の村では開拓当時の建造物が移設されているからだ。



時計台の菱葺屋根

例えば、北海道大学発祥の地にある重要文化財の時計台（1878年）、北海道大学植物園にある重

要文化財の博物館本館（1882年）、開拓の村にある北海道大学の学生寮（1905年）、北海道大学にある有形文化財の古河講堂（1909年）に菱葺屋根が使われている。



古河講堂の菱葺屋根

特に、この古河講堂は北海道大学では一際目立つ白亜の建築で、当時は林学教室として使われており、埔里の演習林の人々はここで林学を学んでいたのがあった。

何故、北海道から遠く離れた台湾の演習林に、そんな菱葺屋根があるのか、これで謎が解けた。

日本統治時代の台湾でも、洋風建築で菱葺屋根は用いられることはあったが、日本建築には陶器製の本瓦が基本であり、金属の菱葺は不釣合いだ。

ところが、この演習林事務所は、小さな木造平屋の純日本建築にも関わらず、菱葺屋根なのだ。この菱葺屋根へのこだわりは、北海道から百年前に来た先輩達によるものに違いない。先輩達は、雪のない埔里にも、北海道で慣れ親しんだ菱葺屋根を使うことで、この建物に北海道らしさを求めたのだろう。つまり、この菱葺屋根こそが、この演習林と北海道を百年前からつなぐ動かぬ証拠なのだ。そして、私と同様、百年前の先輩たちもこの菱葺屋根を見上げて、遙かかなたの故郷北海道に思いを馳せたに違いない。



演習林事務所の菱葺屋根 (2017年8月15日撮)
丁度百周年にあたるこの年に埔里にいる私は、母校への恩返しとして、百年間見守ってくれた埔里の人々への恩返しとして、この演習林を守り伝えなければならない。こうした使命感が芽生えた。そのためには、まず、この演習林に関する歴史を調べなければならない。こう考えるようになっていった。そこで、私はこの演習林とコーヒーの歴史を調査すべく、台湾に残されている北大演習林とコーヒーに関連する史料収集を開始するとともに、北海道大学演習林にも同様の調査依頼の連絡を入れた。

演習林のコーヒーの木を 1931 年の新聞で発見

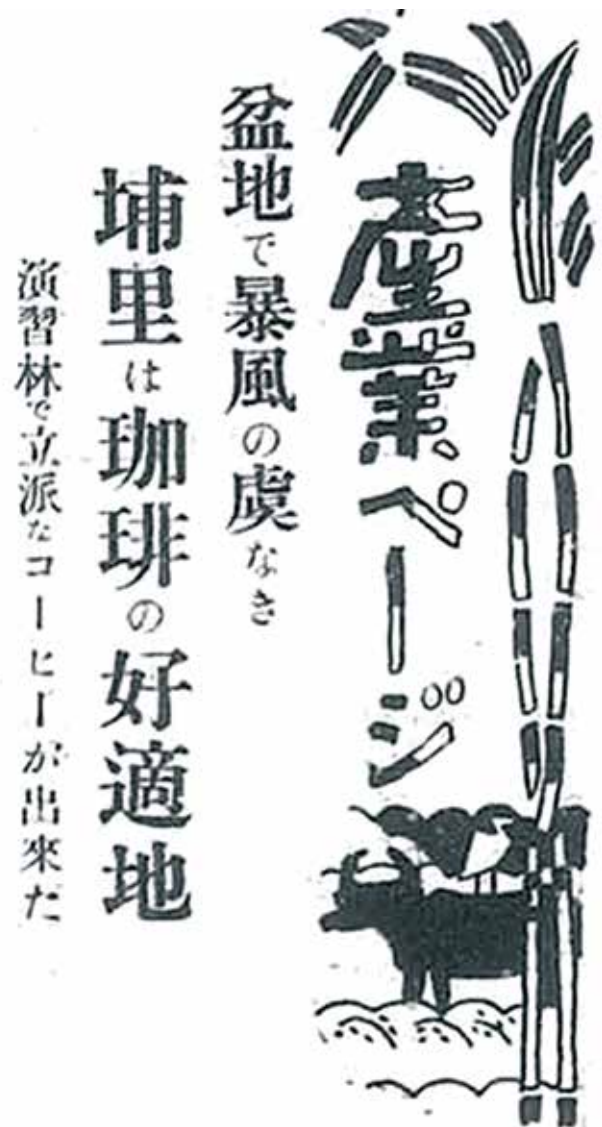
北海道大学演習林で初めてコーヒーが植えられたのは 1936 年としている。一方、陳義方先生からも、埔里演習林にコーヒーの記録があることを教えて頂いた。その発表年に驚いた。1931 年である。1936 年の記録よりも 5 年も古い。

しかし残念なことにこの記録がある 1931 年の新聞記事は埔里の図書館にも無く、手に入れるには時間がかかりそうであった。

また、北海道大学演習林からも返答があったが、北海道大学演習林には、終戦引き上げの際台湾から持ち帰った史料は無きに等しく、1931 年の新聞記事については、その存在すら知らなかった。

後日、台湾大学を通じてようやくこの新聞記事

を手に入れることが出来、二千五百字に及ぶ内容を読んでその精緻さに驚愕した。解説は蛇足と思われるので、以下重要と思われる部分を引用する。



1931年12月14日台湾日日新報 産業ページ
盆地で暴風の虞なき 埔里は珈琲の好適地
演習林で立派なコーヒーが出来た

埔里街における北海道帝國大學農學部附屬演習林には四十株程の珈琲園あり、頃來枝もたわわにルビー宛らの實が稔つてゐたが同演習林主任笹尾修道氏はその實を採取し碎いて試みに粉末のコーヒーを製造してみたところ巷間販賣されてゐる輸入コーヒーに匹敵し優るとも劣らぬ優良品を得た、試みに街内有志の人々に提供してみたところ

その香りといひ、コーヒー獨得の刺激ある苦味といひ、舌觸り得も云えず、咽喉を通過するときの柔く快い味形容を絶し、何れも絶大の讃辭を浴せた

同演習林のコーヒーは樹齡七、八年で殆ど手入れをしたこともなく毎年多量に結實してゐたがコーヒー製法不明の為本年まで見られなかつたが前記の様な優良コーヒーが製出された為俄に熱度が上つて來た埔里街では各家庭の一隅にコーヒーが繁殖してゐるのはざらに見る處で合せて凡そ五百本もあらうとみられる紅黒ルビー色の光澤ある檜の實大の實が鈴生りに熟れても製法を知らない為放任されてゐる

演習林に初めてコーヒーが植えられたのはいつか

この1931年の新聞記事をもとに、演習林で最初にコーヒーが植えられた時期を推測してみたい。コーヒーの木は演習林開設当初には有用樹種として扱われていなかったために、記録には残っていない。

そのため40本もの苗木を別の場所から苦労して運んで植えたとは考えにくい。つまり、この40本のコーヒーの木は、種子から育てられたと考えられる。40本のコーヒーの木の樹齡は7.8年とあることから、種子が植えられたのは、1923年か1924年だ。

それではこの種子はどこから來たのだろうか。林耀堂先生や他の老人の証言からもこの演習林内には様々な熱帯植物が植えられていたことがわかっているが、この中にこの40本のコーヒーの木の母樹があったに違いない。コーヒーの木は埔里では通常4年で開花結実し、その実が落下すると、条件さえ良ければ発芽してくる。したがって母樹が植えられたのは、1919、1920年だろう。このように演習林のコーヒーは演習林同様、ほぼ百年の歴史があると推測できる。

「台湾珈琲の故郷」埔里演習林

先に述べたように、古坑は「台湾珈琲の故郷」として名高い。今のところ、演習林のコーヒーの木が古坑に運ばれたことを証明する史料は見つかっていない。しかし、このことが事実ならば、古坑よりも演習林のほうがコーヒーを植えたのが古いはずだ。

古坑珈琲は、1934年に荷苞山で珈琲栽培を開始している。一方、演習林はこれまで1936年としてきたが、今回の1931年の新聞記事の発見により、古坑よりも演習林のほうが古いことが判明した。

また、日本統治時代に台湾総督府主導で始められた試験所での試験的コーヒー栽培は、昭和初期の1928年に嘉義農事試験所支所が企業的計画の有望なるを発表。

これを機に、民間会社での本格的コーヒー栽培が開始された。現在「台湾珈琲の故郷」として名高い古坑はこの一つで、1934年三菱製紙會社之圖南産業合資會社が古坑荷苞山で栽培を開始している。

他には1932年住田物産の國田正二が花蓮瑞穂舞鶴、1934年木村珈琲店の柴田文次が台東東河泰源でそれぞれ珈琲栽培を開始している。通常、「○○の故郷」を宣言しようとする、いつそれが始まったのかという開始年が重視されるようだが、開始年をこれらと比較しても、1931年の演習林の記録の方が古い。

さらに、この1931年の演習林の優良コーヒーの製出、すなわちコーヒー栽培・精製成功が、埔里の周辺地域に広がった事実も見逃せない。当時の各州庁別コーヒー栽培状況を読み取ると、1929年時点では、台中州（台中市、彰化縣、南投縣）にはこの演習林の記録しかなく、台湾中部地区では、埔里演習林が珈琲の発祥の地と言える。

この埔里演習林の珈琲が、まず同演習林の恵蔭に伝わったと考えられる記録がある。次に埔里演

習林と恵孫に隣接する国姓や魚池に伝わっていったことは間違いない。このことは國姓や魚池の古くからの珈琲農家が、ここから種子や苗を得ていると証言しているからだ。このようにして珈琲栽培が水沙連全域に広がっていったのだ。そして、今や国姓や魚池の珈琲栽培は、町をあげての一大産業になっており、台湾中の注目を集めているのである。

歴史に、もしはないが、1931年の埔里演習林でのコーヒー栽培・精製成功がなければ、現在の恵孫、國姓、魚池の珈琲は無かったとも言える。他の東京大、京都大、九州大の大学演習林は珈琲栽培の記録が無いことから考えても、この北海道大演習林でのコーヒー栽培・精製成功は大きな第一歩だった。そしてこの第一歩が、恵孫、國姓、魚池へと進んでいったのだ。

これらのことより、埔里演習林は「台湾珈琲の故郷」の一つと言えるだろう。

終わりに

「演習林」と埔里人が呼ぶ場所がある。ここは菱葺屋根の政府指定歴史建物があり、「台湾珈琲の故郷」でもあり、埔里人に百年間見守られてきた埔里の宝である。

日本統治時代、前記の4大学が台湾各地で演習林を設置したが、現在でも日本統治時代と同じように演習林と呼んでいるのは埔里だけである。したがって、いかにこの演習林と埔里人がこの百年間密接な関係にあったかが容易に想像できる。だからこそ、この菱葺屋根の事務所も埔里の人々によって百年間見守られてきたに違いない。

台湾における演習林創設の条件は日本本土とは異なり、地域社会・住民との円滑な関係維持が求められていた。埔里の演習林の場合、演習林が街中にあったため、特にこの概念が遵守されたのだ

ろう。

この新聞記事によると、「街内有志の人々に提供」、「實が鈴生りに熟れても製法を知らない」とある。おそらくこの演習林主任の笹尾修道先生がコーヒーの精製を知らない埔里の人々を12月に演習林に集めて、この事務所で粉末のコーヒーを作り、みんなに振舞ったのだろう。この街内有志には、演習林の近所に住んでいた黄先生や林先生、陳先生の親御さんもいらっしやったのかも知れない。

こうして毎年12月になると、台湾人日本人を問わず、事務所に集まり、みんなで楽しくコーヒーを味わったのだろう。そして子供達は、黄先生や林先生のようにコーヒーの赤い実を味わい、種を飛ばして遊んだことだろう。

しかしながら、このときみんなで味わった百年前に植えられたコーヒーは既がない。だから、この百周年を記念し、埔里の宝、演習林を守るためにもう一度埔里のみんなで演習林にコーヒーを植えたいと思う。そしてまた演習林で「台湾珈琲の故郷」を復活させ、当時と同じように、この演習林で出来たコーヒーを埔里のみんなで味わいたい。そのコーヒーは、きっと演習林百年の歴史の味がするに違いない。



演習林事務所（2017年8月15日撮）